

修士学位請求論文要旨

ロールズ『正義論』における反照的均衡と道徳的直観の意義

国際日本学研究科 国際日本学専攻 文化・思想研究領域

竹田理貴 4910129001

ジョン・ロールズ(John Rawls, 1921-2002)の『正義論(A Theory of Justice)』で展開される倫理的な方法論において注目すべきは、これまで特に注目が払われてきた「原初状態(original position)」や「無知のヴェール(veil of ignorance)」だけでなく、むしろそれらよりも大きな方法論的文脈にある「反照的均衡(reflective equilibrium)」であること。そして、ロールズは反照的均衡という方法論でもって、否定的評価が付されがちであった「道徳的直観(moral intuition)」を道徳理論に用いることの意義を再定義したこと。以上の2点を明らかにすることを本稿は目指している。

本稿は以下の流れで議論が進められる。まずは、政治哲学者ロールズが登場して盛り上がりを見せる以前は政治哲学界が不況にあったこと、そして社会契約論を再構築させることで長年優勢を誇ってきた功利主義に取って代わる体系的な理論「公正としての正義」の提出をロールズが目指していたことを確認する。ついで、ロールズ『正義論』で展開される倫理的方法論の解釈に迫っていく。ここでは、多くの研究者が論じてきた「原初状態」が確かに重要な役割をもつことが認められるが、ロールズの方法論で特に重要な役割を担うものは「反照的均衡」であるとの解釈が提示される。反照的均衡とは次のことを指す。①道徳的直観によって把握される私たちが抱いている「道徳判断」と、②公正な正義原理が選択されるよう複数の要素を考慮して適切に設定された「契約装置」と、③そのような契約装置から導出された「正義の原理」、という3つを行ったり来たりと複線的にフィードバックした結果として理論全体が整合した事態が反照的均衡である。このロールズの方法論における反照的均衡という大きな枠組が、理論の成否を占うため、たとえば原初状態だけに注目してしまっただけでは、ロールズの方法論を捉えきることはできないであろう。ロールズ『正義論』の「方法論」に関する議論とのつながりで、その「主題」と「原理」についても取り扱い、『正義論』の概要を把握しておく。ロールズ『正義論』は、その「主題」として「社会正義」とりわけ「社会の基礎構造」を第一の主題と規定し、人びとの基本的権利や義務、社会的・経済的利益の割り当て方を論じた。そして、反照的均衡という方法論から導かれる「正義の原理」として、人びとの諸自由を確保する第一原理と、社会的・経済的不平等が認められる要件を定めた第二原理からなる「正義の二原理」を提唱していた。

ロールズ『正義論』の全体像の把握と、反照的均衡という方法論の本稿なりの解釈を論じた後は、反照的均衡に対する評価を見て行く。まずは、20世紀初頭以降に現れた主要な倫理学の諸方法を整理しながら、ロールズの方法論「反照的均衡」が倫理的方法論の歴史において、どのように位置づけられるかを確認する。近代の倫理的方法論の歴史的潮流において台頭していた方法論は、分析倫理学を基礎に置いて道徳概念の分析がなされた後に、はじめて倫理学の実質的内容に関わる議論に進むことが可能であるとの態度を取った。その一方で、ロールズは分析倫理学が果たした貢献を

認めるものの、分析倫理学からスタートするのではなく、道徳的直観によって把握される私たちが抱いている道徳判断を頼りに、実質的倫理学にストレートに取り組んでいく姿勢を取った。分析倫理学が主流であった当時に、分析倫理学ではなく道徳的直観を用いながら実質的倫理学そのものに取り組んだロールズは、方法論の時代的潮流に全面的な対決姿勢を取ったのである。

分析倫理学を基礎に置く方法論が主流であったことを確認したところで、分析倫理学の大家であり、功利主義者の一人でもあるヘア（Richard Mervyn Hare, 1919-2002）が書いたロールズ『正義論』の書評論文において展開されるロールズ批判を見ていく。ヘアはロールズが、その倫理学的方法論において分析倫理学的基礎を踏まえずに主観主義へと結びついてしまう道徳的直観を使用してしまったことと、『正義論』が結局はロールズの直観を頼りにロールズにとって都合の良いものになるよう仕立てられていること、という批判を展開する。

「道徳的直観の使用」と「理論の仕立て」というヘアのロールズ批判を整理した後は、ロールズがそれらの批判にいかに応答するのかという考察に進んでいく。ロールズの応答は次のようになろう。分析倫理学が達成した成果は認めるものの、それを道徳理論の基礎に据えるには不十分であるから、その成果を利用しつつも、方法論の主たるアプローチは、①道徳的直観によって私たちが抱いている道徳的「判断」と、②原理を演繹する適切に設定された「装置」と、③演繹された「原理」という3項を行ったり来たりした後に達成される反照的均衡を目指し、理論全体が整合的で人びとが合意できる理論を構築することとなる。また、道徳的直観を使用して理論を仕立てることについては、それ自体は罪と見なすことはできず、重要なことは、その仕立てが人びとを説得するに十分に魅力的かどうか、という仕立ての上手さであること。ここで注意して欲しいのは、これらのロールズの応答はロールズ自身が実際にヘアを名指しして反批判したものではなく、竹田がロールズの諸著作をもとに、ロールズがヘアに応答するならばあり得たであろう反批判を想定して論じたものである。

ロールズの倫理学的な方法論は現代のスタンダードな方法論として認められているものの、反照的均衡概念を理解しなければ、その方法論を捉えきることはできない。原初状態といった概念がロールズの方法論において鍵概念であることはもちろんだが、原初状態や無知のヴェールといった概念は反照的均衡という枠組みの中にある。ロールズの倫理学的な方法論の一番大枠に当たる反照的均衡の重要性に読者の注意を集めることができたならば、本稿の目標のひとつは達せられる。

反照的均衡に加えて、本稿が論じたことはロールズ『正義論』における道徳的直観の意義である。主観主義へと陥ってしまうといった理由から否定的に捉えられ、排除することが目指された道徳的直観を、反照的均衡の枠組みでもって道徳理論に用いることの意義を論じた。20世紀初頭以降に流行した分析倫理学の成果を認めるものの、

分析倫理学から出発するのではなく、道徳的直観によって把握される道徳判断をもとに、反照的均衡への探求を歩んでいくことが、道徳の方法論のあるべき道との議論が展開される。

原初状態の設定をロールズは恣意的に行っているといった批判がヘアからなされている。ロールズ『正義論』の諸想定が正しいものであるか、論証の運びに無理はないか、理論の帰結に私たちは合意できるかといった検討は今後の課題として残る。

私たちがすべきことは、反照的均衡説という方法論を捨てるのではなく、反照的均衡を目指して様々な要素を行ったり来たりしながら考えを深めていき、一步ずつ道徳理論の探求の途を歩んでいくことである。その踏破の果てに、道徳理論の完成が見られるはずである。